



紙に縋る。

青山文平

「紙と私」というテーマなのに恐縮なのですが、私は原稿を起すのに紙を使いません。パソコンのワープロソフトで書きます。なんでキーボード派かと言えば、脱稿までに三桁の回数は書き直すからです。その上、原稿は常にきれいでないと我慢なりません。修正の書き込みだらけの原稿では、頭にノイズが響いて文章が入ってこない。もしも自筆ならば、四百字詰原稿用紙の一字だけ直したとしても、最初から一枚まるごと書き直すことになります。で、私の場合はキーボードに向かうしなくなるのです。

だからといって、紙との縁が薄いわけではありません。むしろ、紙に縋っていると、言ってもよいでしょう。これは私の執筆スタイルと絡んでいます。私は、い

わゆるプロット、設計図をつくらない書き手です。ごくつとした構想を浮かべて、導入部のシーンを決めたら、あとは指に任せます。展開は登場人物たちが決める。彼ら、彼女らがなにを喋り、どう動いたかによって、どんな世界が移ってゆきます。自分でも、ああ、こんな風になっちゃうんだと驚いたり、感激したりする。私にとっては、この自分に裏切られる喜びこそが、小説を書く醍醐味なのです。

その代わり、怖い。言ってみれば、小説世界が降りてきてくれるのを待ちつつ書くわけですから、毎回、降りてきてくれなかったらどうしよう、という恐怖と抱き合わせです。幸い、これまではなんとか降りてきてくれましたが、次も降りてきてくれる保証などあるはずもありません。この恐怖を幾分なりとも和らげてくれるのが、実は紙なのです。

小説は、世界のピース……欠片を集めて、書き手なりに編集する作業です。私は時代小説の書き手なので、史実のなかにそのピースを見つけます。ミス・ファン・デル・ローエの「神は細部に宿る」のように、ピースのなかには、小さな球のなかに本質が凝縮しているようなピースがあるのです。書いていないときのあ



あおやま・ぶんべい●小説家。神奈川県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。18年間の出版社勤務の後、フリーライターを経て2011年『白樺の樹の下で』で第18回松本清張賞受賞。15年には『鬼はもとより』で第17回大藪春彦賞受賞。16年『つまをめとらば』で第154回直木賞を受賞。

らかたの時間は、そういうピカピカのピースを探し回る作業で埋まります。集めたピースたちを寝かせておくと、やがていい感じに練れて、降りてきてくれるのです。

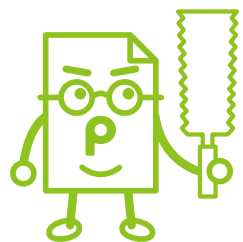
とはいえ、そんなピカピカのピースは滅多に見つかるものではありません。数十冊の専門書を読んでひとつも見つからないのは当たり前で、かなりタフな作業になります。この砂を噛むような作業をすこしでも潤いあるものにするために、気に入った万年筆で読書記録をつけるようにしているのです。いまつかっている万年筆は十一本。一ページごと、あるいは見開き二ページごとに、持ち替えます。万年筆をつかい分ける、という男のこならでの楽しみで、辛い作業を乗り切っていると言ってもよいかもしれません。

ですから、紙に縋る。万年筆の書き味を決めるインクフローは、紙との相性で決まります。良い万年筆を求める者は、良い紙を求める者でもあるのです。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

伐ることによって育つ森がある。

木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまふんです。森がすくすく育つためには、木を伐ること(間伐)も大切。さらに、そのとき伐った木(間伐材)は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は10月6日号、林家たい平さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake